

## 【城山先生】

城山氏の報告のテーマは、「近代アジアにおける水圏と社会経済：データベースと空間解析による新しい地域史の探求」であり、本プロジェクトの概要が紹介された。まず、研究の目的として、従来の各国史の集計としての地域史や西洋＝非西洋の二分法で規定されたアジア史を乗り越えるために、アジア地域に内在的な特徴に基づいた地域史を構想する必要性が議論された。具体的には、アジアの環境的条件に関連して、モンスーン・雨季および水圏という2つの特徴が挙げられた。続いて、先行研究として「アジア間貿易論」や「水力社会論」、「マクロ・リージョン」、「歴史の3層構造」などの議論を検討し、本研究の新規性を確認した。研究手法としては、「自然環境と自然現象」、「生産とライフサイクル」、「移動と分配」という3つの問題系を設定した上で、空間情報データベースを構築し、空間解析によってデータを分析するというものである。分析を通じて、統合された地域史の構築と地域内での多様性の探求が可能になり、環境・生産・商業の全体史を描くことが期待される。

## 【China Group】

中国班の報告者は、濱下武志氏・木越義則氏・村上衛氏であった。

濱下氏の報告は「中国海関報告の観点から見た水圏」がテーマであり、中国海関文書の内容が分析された。具体的には、まず過去の研究が中国海関文書における貿易に集中しており、国内事情を扱った文書に関しては研究が少ないことが述べられ、続いて中国海関の組織構造が説明された。最後に、中国海関文書に含まれる報告の多様性が提示された後、漢口の気象・水位と農業への影響に関する分析を具体例としながら、海関文書を通じて近代史像を描き出す手法が示唆された。

木越氏の報告は「開港場の新聞の船舶情報に基づくアジア太平洋ネクサスの再構成」がテーマであり、現在構築中の船舶情報データベースの紹介と現時点での発見の報告がなされた。このデータベースは、世界各国の 19 港の船舶情報を含んでおり、交通革命や産業革命の影響を考慮するため、5 つの基準年（1851・1873・1903・1913・1933 年）が選ばれている。報告では、上海や香港、ムンバイ、シドニーなどの港を例に、データベースの数値をもとに貿易径路を可視化した図を用いて議論が展開された。

村上氏の報告は「清末における西江の貿易と『海賊』」がテーマであり、清朝末期に珠江の一部を成す西江に出没した「海賊」に関する議論が行われた。報告では、まず 19 世紀後半から 20 世紀初頭の西江において貿易・航運の歴史が概観された。続いて、1903 年までの貿易・航運の急拡大に伴って海賊問題が発生するようになり、海賊の集団規模は 5 人から 150 人ほどであること、各事件の被害額は小さく数百ドル程度であること、事件の発生は夏と秋に集中していることが説明された。また、具体例としては、英国企業の所有する船舶である S・S・サイナムの海賊被害ならびに事件後の英中の対応が紹介された。最後に、その後の西江における西欧の影響力の低下に伴って海賊に関する関心は低下したものの、依然として海賊による被害は発生していたことが示された。

質疑応答を含めた 3 つの報告において特に印象的だったのは、歴史データを用いた研究の可能性と限界に関する議論である。例えば、濱下氏の報告に対しては、なぜ漢口の海関は降雨量を記録していたのかという質問が、木越氏の報告に対しては、船舶情報において最終目的港と中継港をいかに区別するか、あるいはそもそも区別が可能かという質問が提出された。歴史データは過去の当事者が目的を持って収集・整理・記録したものであるため、現在の研究者が扱う際にはデータの背景を十分に理解した上で活用することが重要であることを、議論を通じて改めて認識させられた。

## 【Ka-chai Tam 先生】

Ka-chai Tam 氏の報告のテーマは、「明清中国における沿海省の判例に関する歴史 GIS (1550-1850)」であった。本報告では、Tam 氏が現在構築中の歴史 GIS データベースが解説されたほか、関連する他のプロジェクトの紹介が行われた。このデータベースは、明清時代の判牘から収集した 10,000 件あまりの判例の分析を目的としており、その利点は各判例の質的情報を量的情報に変換することで更なる空間的・社会的分析が可能になる点である。Tam 氏によれば、判牘は社会問題や庶民の紛争に関する信頼に足る記録の宝庫であり、その分析を通じて我々は明清社会に対する理解を大いに深めることができる。データベースの構築方法としては、各判例から多数の項目に分類された情報を抽出し、マイクロソフト・オフィス・アクセスに入力するという方法が採られている。データベースに含まれる項目は、判例の名称、時期、罪人と被害者の身分、刑罰など 20 にのぼる。現時点で入力・分析が完了している判牘は 3 種類にとどまり、10,000 件すべてが完成するまでには長期の作業が必要になる見通しである。

上記のデータベースの解説に加えて、Tam 氏は関連する 3 つのプロジェクトの紹介も行った。1 つ目は、フランス国立研究機構から援助を受けている「中国の空間を合法化する」プロジェクトである。これは、すべての明清の法典を英語とフランス語に翻訳し、歴史 GIS を構築する試みである。2 つ目は、地方志をもとにした松江府の歴史 GIS プロジェクトである。人災・自然災害をもとに、1392 年から 1816 年の松江府の人口を推計し、論文として発表した。3 つ目は、中国商人の漢方薬の東南アジアへの輸出に関するプロジェクトである。香港・広東の商人が多様な漢方薬の原料をいかに調達したかを地域ごとに分析するためには、歴史 GIS による分析がきわめて有用であるという指摘がなされた。

質疑応答を含めた本報告の議論において最も示唆的であったのは、データベースを構築する際に念頭に置くべき問題設定の重要性である。本報告に対しては、なぜ明代の途中の 1550 年を始点に設定したのか、なぜ沿海省を対象としたのか、あるいはデータベースの中心となるのはどの時期・地域かという質問が提出された。Tam 氏からは、1550 年を始点としたのは以後に地域の発展と貿易の拡大が開始したため、そして中でも沿海省では経済発展が顕著であり、データが豊富であるためという回答がなされた。歴史データを大量に用いてデータベースを構築する、あるいは歴史 GIS を用いて分析を実施するという手法面での新規性だけでなく、明確な問題設定や作業仮説を準備しておくことが新たな研究を生み出す上で重要であると痛感した。